

## P10-166

リンパ浮腫外来開設の取り組み-QOL向上の糸口として-

諏訪赤十字病院 看護部

○佐々木 智美、蟹江 弓子、代田 廣志

背景 これまで、リンパ浮腫のケアと術後の予防に対する指導は入院患者を対象に実施していた。一方、通院中の患者は主治医や看護師が患者から相談を受けた場合に、セルフケアの指導や可能な範囲でのケアを行っていた。以上の方法では、継続的な関わりや地域にいるリンパ浮腫患者のケアを行うことは無理であり、解決策としてリンパ浮腫外来を開設することになった。経過外科医師と連携してリンパ浮腫外来の立ち上げ準備を行い、院内と地域の医療施設へ発信をした。また、一般向けとして目に触れやすい場所に外来の案内のパンフレットをおき、待合のプラズマディスプレイやホームページにも案内を流した。結果・状況2010年1月から毎木曜日午後1時にリンパ浮腫外来を完全予約（定数最大4名）、自費診療で開始した。期間；1月～5月 外来通院に至った患者5名（上肢3名、下肢2名）、経済的な理由などで通院に至らなかった3名（上肢1名、下肢2名）、リンパ浮腫の改善とセルフケア習得して通院を終了した患者2名（上肢2名）であった。リンパ浮腫外来受診の動機は、院内紹介4名、パンフレットなどで知った2名、院外紹介2名である。考察諏訪医療圏内ではリンパ浮腫外来のある施設は当院だけである。患者は潜在的に相当数いると考えている。院内からの紹介数が少ないと感じているが、入院治療中に関わっている事例も多くなっており外来数が増加すると思われる。リンパ浮腫で悩んでいたり困っている患者は、リンパ浮腫ケアを習得することによりQOLの向上に結び付き、上肢の2名が通院を終了した。開始して数カ月しか経過していないため、今後の動向を見ながら外来の回数などを検討していく必要がある。また、経済的な理由（自費診療）で通院を断念している患者もおり、今後の検討課題でもあると考えている。

## P10-168

禁煙外来卒煙後の禁煙状況実態調査報告

大田原赤十字病院 内科外来

○檜山 二美子、今井 加代子、森 貴美子、阿久津 郁夫

【はじめに】2008年7月より禁煙外来を完全予約制で開設した。2008年は25名、2009年は56名が受診している。患者は、一昨年より2倍に増加している。そのうち禁煙が成功し卒煙証書を受領できた患者は25名であり30%であった。

【目的】禁煙外来を受診し卒煙証書を受領した患者の追跡調査を行った。

【方法】開設当初より卒煙証書を受領した患者にアンケートによる紙面調査を実施し卒煙後の禁煙状況を確認した。

【結果】受診者の背景は、何らかの基礎疾患があり継続治療を行い、主治医より禁煙外来受診を勧められた患者像と、患者自身が何らかの理由で禁煙を試みようとする自主的に禁煙外来を受診した患者像に大別された。主治医より勧められた患者像の方が成功率は高かった。

【考察・結語】成功率を高める要因として、受診動機が関係されていると考える。基礎疾患があり主治医より勧められ受診した患者は、禁煙の必要性を理解し、禁煙が守られていることに主治医から評価されている。禁煙外来医師以外の医師からも評価されることにより、動機付けが明確になり禁煙意欲が高められている。自主的に禁煙しようとする患者は現在の健康状態に緊迫した所見、症状など動機が少なく、禁煙外来のみの関わりとなっている。複数のポジティブフィードバックを受けられる患者の方が、高い禁煙成功率に繋がっている。

## P10-167

人間ドック当日における特定保健指導の現状と1年後の評価

日本赤十字社熊本健管センター 保健看護課

○石本 裕美、前田 豊美、松山 さおり、牛島 絹子、河津 佐和子、緒方 康博

【目的】平成20年度からスタートした特定健診・保健指導では、「効果のある保健指導」が求められている。当センターでは、初年度から特定健診・保健指導の委託を受け、積極的支援・動機づけ支援を実施している。今回、平成20年度の人間ドック当日の積極的支援利用状況および積極的支援利用者の成果を報告する。

【方法】平成20年4月～平成21年3月に人間ドック（特定健診）受診者の積極的支援利用率、支援継続率、途中終了者の主な理由を分析した。また、1年後評価が可能な77人の介入前と6ヵ月後、1年後の体格（体重・腹囲）、血圧、血液検査結果等を比較検討した。

【結果】人間ドック当日の積極的支援対象者は、604人、利用者249人、利用率41.2%であった。継続率は、92.8%で、途中終了者の主な理由は、本人の申し出（仕事や家庭の事情）10人（55.6%）、音信不通8人（44.4%）であった。また、1年後評価が可能であった77人、男性72人（平均年齢52.3±5.4）女性5人（平均年齢53.8±4.4）について体重、血圧、血液検査等で有意な改善が認められ、57.1%にメタボリックシンドロームの改善がみられた。

【考察】積極的支援利用者について、6ヵ月評価から1年経過時点まで一定の効果を継続できていることが確認できた。当センターの人間ドックは、経年受診者が約7割を占める。今後、長期的な改善効果維持のため、ドック時の生活相談の場で継続的な介入を行うとともに、追跡調査にて効果検証を行いたい。また、途中終了者や改善効果の認められなかったケースについて要因や介入方法等の見直しを行い、効果的なプログラムの検討を重ねていきたい。

## P10-169

禁煙外来の3年間の振り返りと今後の課題

神戸赤十字病院 看護部

○洲濱 清美、太田 恵子、黒住 薫

【目的】「喫煙は病気であり、禁煙は必ずしも自分の意志でできるものではなく、医師のコントロールのもとで治療すべきもの」という基本的な考えに立ち、厚生労働省が積極的に取り組み、平成18年4月から保険禁煙治療が開始された。これを機に当院では平成18年7月に禁煙外来を開設した。開設から3年が経過し、禁煙外来の現状を振り返り今後の課題を明らかにした。

【方法】平成18年7月から平成21年12月までに取り組んだ内容と、当院の禁煙外来を受診した78名のデータを振り返った。

【結果】対象は男性50名、女性28名。成功者は46名。禁煙外来を受診したきっかけには「主治医のすすめ」「家族その他のすすめ」「本人の意思」があり、それぞれの成功者は18名中14名、8名中6名、52名中26名であった。

【考察】開設当初より私達は「本人の意思」による成功者の方が多いと考えていたが、実際には「主治医のすすめ」による成功者の方が多かった。その成功例から、基礎疾患があり主治医の説明で自分にとって禁煙の必要性を真剣に捉えられたからではないかと考えた。このことから医療従事者の働きかけが重要であることがわかった。しかし、当院での受診のきっかけを比較すると「主治医のすすめ」による受診が少ない現状であり、医療従事者からの働きかけが患者獲得と成功者の増加に繋がると考えた。

【今後の課題】1.医師にアプローチを行い、一般外来でも医師と協同して、喫煙者にアドバイスし禁煙を啓蒙する。2.禁煙の成功・不成功の要因を明確にし、それに合わせた対応策を検討して今後の支援に役立てる。3.職員・来院者及び入院患者の禁煙外来への認知度が低い為、パンフレットを作成・ポスターを改訂し、喫煙している全ての患者を対象に情報を提供する。